

地域コミュニティの強さが防災力になる
緊急時の気象情報活用を提案

「防災フォーラム」(一関市、防災サポートいちのせき共催)は3月11日、川崎市民センターで行われ、約180人が気象情報に関する講演と地域の防災活動についての発表を聞き、防災への意識を新たにしました。

同フォーラムは、市が2012年に制定した「となりきんじょ防災会議の日」に合わせて毎年開催。家族や住民同士で災害に備えて話し合う機会にすることを目的に開かれています。

講演を行った盛岡地方気象台観測予報管理官の高橋勉さんは、命を守るため、気象台などが発表する情報を収集し、自発的に行動することを提案しました。



歌声に願い込めて。届け、追悼の思い
夢あかりで東日本大震災の犠牲者を追悼

「追悼夢あかり一関」(同実行委員会主催)は3月11日、市役所前広場で行われました。灯籠500個が「3.11」の形に並べられ、参加者は犠牲者の冥福を祈りながら被災地の早期復興を願いました。

震災のあった14時46分、参加者全員で黙とう。一関修紅高校生と平泉町の学童保育すぎのこクラブの子供たちが合唱とオカリナを披露しました。同音楽部部長の熊谷祐香さん(2年)は「震災の犠牲者や被災された人への思いを込めて歌った。災害を忘れないためにも、演奏会などで追悼の歌を歌っていき」と話してくれました。



被災地の早期復興と犠牲者の鎮魂を願って
一関中特設合唱部が一ノ関駅でコンサート

東日本大震災から7年目となる3月11日、一関中学校(福井信夫校長、生徒244人)の特設合唱部(1、2年生60人)は「届けわたしたちの歌 希望の歌コンサート」をJR一ノ関駅西口の駅前広場で開催しました。

同コンサートは今年で4年目。顧問の綱川美代子教諭の指導のもと、今年1月から練習に励んできました。「群青」「心つないで」など10曲を披露。被災地の復興と犠牲者の鎮魂を願う歌声が、青空の下に響き渡りました。部長の渡邊蓮さん(2年)は「一日も早い復興を願っています。被災された人にも私たちの思いや歌声が届くよう頑張りたい」と力を込めました。

金箔と銀箔があしらわれた「まとい」を披露
長年の活動が特別表彰を受章

「第70回日本消防協会定例表彰式」(日本消防協会主催)は3月6日、東京都の日本消防会館で行われ、本市消防団(大森忠雄団長)が「特別表彰まとい」を受章しました。「特別表彰まとい」は、昭和54年に創設。全国に約2200ある消防団の中から、毎年10団体に限って授与されます。

大森団長らは3月16日、市役所を訪れ、勝部修市長に受章を報告しました。勝部市長は「一関は壊滅的な台風被害から立ち上がったまち。その原点を受け継いでほしい」と激励。大森団長は「先輩たちから引き継いだ精神を、若い団員たちに伝え、地域の防災に尽くしたい」と誓いを新たにしました。



無病息災や五穀豊穡の願いを込めて
長徳寺「蘇民祭」で裸男たちの争奪戦

長徳寺(藤沢町保呂羽・渋谷真之住職)の「蘇民祭」は3月4日に行われました。無病息災や五穀豊穡などの願いを込め、約40人の裸男たちが蘇民袋を奪い合いました。

雉子川で身を浄めた下帯姿の男たちは、点火された井桁状に積まれた焚場に登る「柴燈木登り」を披露。蘇民袋を奪い合ってその年の「取主」を決める「袋ねじり」では、男たちが折り重なるようにして激しい争奪戦を繰り広げました。

1時間にわたる白熱の争いを制した会社員の島山真さん(39・紫波町)は「取り主は2度目。御利益があるよう頑張った。良い年になってほしい」と頬を紅潮させていました。



研究者が成果を報告
一関の偉人、芦東山の功績をひも解く

「芦東山記念館調査研究事業報告会」(市教育委員会主催)は3月10日、一関図書館で開かれ、100人を超す参加者が研究の成果を興味深く聴いていました。

宮城教育大講師の張基善さんと早稲田大文学部教授の稲畑耕一郎さんが、後藤新平と「無刑録」の関わり、芦東山の国際的な広まりや、来年度から始まる小説の連載について説明しました。

中国から留学し、日本の歴史を学んでいる間秋君さん(26・仙台市)は「無刑録は世界に向けて発信するべき内容だと思います」と熱く語ってくれました。



痛快な語り口で未来を思い描く
夢と希望があふれるほら話で笑って元気に

「第22回ほらふき大会」(田河津市民センター、田河津振興会主催)は2月18日、同市民センターで開かれ、住民約70人を前に、出演者らが夢いっぱいほら話を繰り広げました。

今回は市内外から9人が出場。軽妙な語り口で壮大なほら話を発表しました。審査中には昨年に引き続き、特別ゲストとして、岩手大学落語研究会の学生が落語と漫才を披露。会場は終始笑いにあふれていました。受賞者は以下の通り(敬称略)。

▶ほらふき大賞=菊池公雄(大東町) ▶ユーモア賞=岩淵紀栄子(同) ▶いきいき賞=菊地俊雄(同)



道の駅厳美溪の「歩き初め会」に1歳児157人が参加
一生の幸せ願い、一升の餅を背負う

「第17回1歳児の歩き初め会」(美の郷主催)は3月3日、厳美町の道の駅厳美溪で開かれました。一升餅を背負った1歳児が、家族の温かい声援を受けながら一生懸命に歩きました。

同イベントは、一生分の苦勞に見立てた一升の餅を背負わせ、子供の健やかな成長と幸せを願う一関地方の伝統行事。市内外から参加した157人の1歳児が約2・6kgの餅を背負い、保護者に支えられながら約5分を往復しました。

東山町松川の佐藤真紀さん(36)は「いい記念になると思って参加しました。元気で健康に育ってほしい」と話し、息子の圭司君の奮闘ぶりに拍手を送っていました。